

『おらが春』の素材

黄 色 瑞 華

一

『おらが春』第十四話(さと女の死)に添えてある一茶の句は合計七句である。そのうち「露の世は露の世ながらさりながら」「貫ふよりはやくうしなふ扇かな」の二句は、『七番日記』の「露の世は得心ながらさりながら」(文化十四・五)と「又扇貫ふやいなやおとしけり」(文化十二・六)「貫ふより早くなくなる扇哉」(文化十四・五)を推敲したものであるが、他の五句「俄川とんで見せけり鹿の親」「大寺や扇でしれし小僧の名」「あばれ蚊のついと古井に忍びけり」「四五間の木太刀をかつぐ袷かな」「太郎冠者まがひに通る扇かな」は、『八番日記』にそれぞれ「俄川を飛んで見せけり鹿の親」(文政二・九)「あばれ蚊のこそと古井に忍びけり」(文政二・八)「三間の木太刀をかつぐ袷かな」(文政二・九)「太郎冠者まがひに通る扇かな」(文政二・六)とみえる。

同じく、さと女のことを記した第十二話(さと女の記)の一茶の句は十二句、そのうち「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」(文化十五・四)「柳からもくんぐあゝあと出る子哉」(文化十三・三)「年間へば片手出す子や更衣」(文化十五・

四)「たのもしやてんつるてんの初袷」(文化十三・四)「あこが餅くとして並べけり」(文化十・十二)「餅花の木陰にてうちあはれ哉」(文化十・十)「涼風の吹く木へ縛る我子哉」(文化十三・五)の七句は『七番日記』からそのままとったものである。また、「蓬萊になんむくといふ子哉」は『七番日記』の「蓬萊に南無くといふ童哉」(文化八・一)、「名月を取つてくれるとなく子哉」も『七番日記』の「あの月をとつてくれると泣子哉」(文化十・八)、「わんぱくや縛られながらよぶ螢」も『七番日記』の「わんぱくや縛れながら夕涼」(文化十三・三・五)の再案、「妹が子の背負ふた形りや配餅」は『句稿消息』の「妹が子は餅負ふ程に成にけり」(文化十一)を推敲、「妹の子のせおふたなりや配餅」として、『八番日記』(文化二・四)に収めておいたものである。⁽¹⁾

第十二話に添えてある十二句中、十一句までが『七番日記』時代の作であるのにくらべ、第十四話に添えてある七句中の五句までは『八番日記』の作である。それは第十二話が前年来その執筆が意図され、相当な用意がなされていたのに対し、第十四話はいわば執筆中の突発的事件だったからである。『おらが春』には、文政二年以前からその素材が用意され、部分によってはすでにその草稿も成っていたと推定される章段と、文政二年中にその素材を得た章段とがなる。第十二話は前者の典型的な例で、これは章末に添えてある句も『七番日記』時代のものである。また、第四話・第八話・第九話のように、章末に添えてある句には『七番日記』と同形・同趣句をみることはできないが、その素材は早くから用意されていたと推定できる章段もある。すなわち、第四話は鬼貫の『禁足之旅記』(元禄三刊)に擬したものであり、八・九・十・十一話は継子としての自己の境涯を記したもので、第八話には宗鑑、正勝、紅雪などの継子を素材とした句が集めてある。第九話は『袋草子』や『西公談抄』にある貫之の娘の歌、第十話は「雀の子」の吟、第十一話は「まま子地蔵の伝説」である。後者の典型的な例は第十四話、第二十話である。これは、第一話のように第十四話の事件を経て第二十一話の成立の後、差し替えが行なわれたり、清書の時点で得た作品(句)を挿入したと考えられる章段もある。⁽²⁾

素材、『七番日記』『八番日記』の関連から、文政二年以前に準備のあったと推定される第八話・九話・十話・十一話・十二話（八と十一話には『八番日記』の句はなく、十二話には『八番日記』四月の条に同趣句が一句みられる）は、継子としての自己の境境を記したものと愛児さと女への恩愛の情を記したものである。

二

本稿のめざすところは、『おらが春』一卷の素材を探り、それが作者によっていかに把握されているかを求めて行くこととするにあるのだが、まず二十一の章段にわたって能う限りの素材追求を試みることはよりはじめ。

第一話（普甲寺上人の迎講）は、もと『今昔物語』巻十五「始三丹後国迎講」聖人往生語」にみえる迎講説話が初見であり、一茶は無住の『沙石集』（弘安六成）の巻九下「迎講事」によつたとみて疑いない。『沙石集』の刊本は、慶長十行本（十卷五冊）・慶長十行本（十卷十冊）・無刊記本（十卷十冊）・天和二年本（十卷十冊）・元和四年本（十卷十冊）などの古活字本、正保四年本（十卷十冊）・慶安四年平仮名本（十卷十冊）・天和三年本（十卷十冊）・貞享三年本（十卷十冊）・無刊記十二行本（十卷十冊）・無刊記十三行本（十卷十冊）などの整板本があり、一茶の目にふれたとするに難なく、『吟社懐旧録』中にみずからその書名の記載がある。

一茶自身の句については後でまとめて述べることにして、第二話（高丸の死）は、『八番日記』三月の条に「七雨妙専寺内タカ丸荒井坂川ニ入没。十一歳。観了々々ト呼ト云々。」「九晴 タカ丸葬。」とあって、これは文政二年三月七日・九日の事実が素材である。

第三話（天の音楽）は、『日本書紀』『文徳実録』にその瑞祥をみたとあり、中国古来の伝説である。『希杖本発句集』に「天の音楽聞ゆるといふ事はやりければ三月十九日通夜せし暁に」と前書されているが、『八番日記』同日の

条には「晴」とのみあって、他にもその記載はない。『八番日記』二月の条に「天の音楽」と前書して「今の世も鳥はほけ経鳴にけり」、三月の条に上五を「君が代は」とするものと「夜桜や天の音楽聞し人」があるから京山の『蜘蛛の糸巻』に「(天明六年初春から)雷にもあらざる響、天にあり。北に聞くかと思へば南にあり。」とあるような流説にヒントを得ての虚構であろう。

第四話(奥羽への首途)、これは鬼貫の『犬居士』中の「禁足之旅記」に擬した虚構で、『八番日記』四月の条には「(十)六雪 昼より雨 午後太足没」、閏四月の条には「(十)六晴 大酔昼寝」とある。

第五話(魚淵の牡丹)は、『八番日記』の四月の条に「卅晴 魚入 文路、今井□中牡丹一見」とあって、この章段は文政二年四月三十日の体験によるものである。

第六話(蛙の野送り)の前半は、柏原界限の子どもの遊びに材を取り、『本草綱目』を引き、後半は『続日本紀』『前々太平記』などにある撰津・天王寺の蛙合戦、長嘯子の『虫歌合』などによった。所収句は前半末の九三(所収句・歌の所載順を示す)は、執筆時の作だが後半の文末に添えてある九四は『七番日記』文化十五年一月の作、陶淵明「飲酒詩」中の「採菊東籬下、悠然見南山」をふまえてある。九五は其角の『雑談集』『錦繡鍛』所収、九六の曲翠の句は『花摘』所収、他は『八番日記』五・六・七月の条に同形・同種を見出すことができるから、あらかじめ用意してあったものに、執筆時に得た作を追加したものと見てよからう。

第七話(蛇の執念)は、須坂の中村某にまつわる流説であるが、文末の第一句・一〇七は『九日集』所収の「夕月や鍋の中にも鳴田にし」⁽⁴⁾が初案と思われる、その前書には「地獄」とある。『七番日記』九年二月の条に同形が収めてあり、その前書には「六道」とある。一〇八も『七番日記』七年三月の作、一〇九の大江丸の句は『俳懺悔』所収(座五「喰せけり」)、一一〇の光俊の歌は『新撰六帖』、一一一の俊頼の歌は『散木弃歌集』所収、いずれもこの話のために集めてあったものと推定される。

第八話（六川の粟）は、継子の境涯を粟の若木にたとえたもので、自身の句・歌はもちろんのこと宗鑑・正勝・紅雪・未達・嵐雪・芭蕉・風流の句はいずれも継子に題したものである。作者名・句形の異同は手もとのメモによつたことの証と見てよからう。

第九話（貫之の娘の歌）は、『袋草子』『西公談抄』にあり、『宇陀法師』『本朝文鑑』にも引いてある継子の境涯をなげた歌である。

第十話中七は（親のない雀）、第十二話（まま子地蔵）の句（一四二・一四三）はいずれも『七番日記』文化十一年一月の条に見え、中七は「遊ぶ親の」「地蔵のひざも」とあるが、久しくあたたためてあつた世界である。

第十二話（さと女の記）は、其角の『類柑子』中の「ひなひく鳥」を下敷にし、一茶自身の句（十二句）は一〇五をのぞきいずれも『七番日記』の作、貞徳（一五六）以下の八句は、「ひなひく鳥」（一五六・一五七・一六二・一六三）『雑談集』（一五八）『笈日記』（一五九・一六〇）『句兄弟』（一六一）から集めたものである。

第十三話（子を思う親心）も、創作の契機となつた一六〇番の句は、『武玉川』七編に「去られても闇に来て見る幟竿」、『雨窓閑話』に「わかれても闇にみにくる幟かな」とあるものの引用で、『七番日記』十五年六月の条に「闇紛れそつと見来る幟哉」とメモされている。一六〇以下の鬼貫・五明・東陽そして自作の句はいずれも子を思う親の情を吟じたものである。

第十四話（さと女の死）は、『八番日記』六月十三日の記事に「サト笹湯ノ祝」、同二十一日の記事に「サト女此世」居事四百日 一茶見親百七十五日 命ナル哉今巳ノ刻没 葬末刻 夕方斎フルマイ」とある事件とそれに直面しての心のうちを綴つたものである。

第十五話（子を思う鳥）は、おそらく第十四話の事件の後、体験を回想しての作であろう。所収の四句は、一八九・一九〇が初出、一九一の初案は中七以下「鶴よ御役にどれが立」（『八番日記』三月）、立志の句は『俳諧古選』所収。

第十六話（黒姫山の麓）は、文政三年正月一日の日付を有する真蹟、「俳諧寺記」「一茶翁俳諧歌帖」の俳文などと同趣の文章があり、この章段と同根とみられ、『おらが春』のこの章段が定稿であろう。

第十七話（桃李不言）、十八話（諏訪社の栗）、十九話（高井野の月）、二十話（配り餅）は七月以降の作品（句）と見聞・体験である。

第二十一話は、蓮如上人の「御文章」をふまえながらみずからの「安心」を述べて、この一年と一年体の句文集の結びとしている。そして、この章段に呼応させて用紙を異にしている第一話の後半を書き直し、差し替えたのは文政三年に入ってからであろう。

この項の最後に一茶自身の句（二百三十二・重出一）の制作・推敲の過程について簡記しておく⁽⁵⁾。

- A 『おらが春』初出 三十一句
- B 『八番日記』と同形 八十四句
- C 『八番日記』と同趣 七十二句
- D 『七番日記』『八番日記』と同形 四句
- E 『七番日記』と同形 十一句
- F 『七番日記』と同趣 十二句
- G 『七番日記』『八番日記』と同趣 六句
- H 『句稿消息』と同形 三句

また、一茶以外の句歌の出典とその数を簡記すればつぎのごとくである。『随斎筆記』『たねおろし』二、『随斎筆記』一、『雑談集』『錦繡鍛』一、『花摘』一、『俳懺悔』一、『新撰六帖』一、『散木弄歌集』一、『其袋』一、『祇園拾遺物語』三、『句餞別』二、『つなぎ橋』二、『本朝文鑑』一、『類柑子』五、『雑談集』一、『笈日記』二、『句兄弟』

一、『武玉川』『雨窓閑話』一、『鬼貫句選』一、『五明句藻』一、『迹祭』一、『御桜』一、『曠野』『笈日記』一、『曠野』一、『続別座敷』『杉風句集』一、『一字幽蘭集』一、『続今宮草』一、『平安落穂集』一、『夫木和歌集』一、後撰集』一、『俳諧古選』一、未詳四。

三

文政二年以前に準備のなっていたと推定可能な章段は、この年の見聞以外のものを素材とする第一話、第八・九・十・十一・十二話がまず挙げられ、構想をもっていたと推定可能な章段として第三・四・六・七・十六・十八話を挙げる事ができる。

まず、第一話の先行作品・『沙石集』巻九下「迎講事」を見る。「迎講事」は梵舜本（慶長二年書写・お茶の水図書館蔵）、米沢図書館本（古鈔十二帖本）では巻十に収めてある。いま、慶長古活字十二行本によってそれを示すことにする。

丹後国普甲寺ト云所ニ上人アリケリ。極楽ノ往生ヲ願テ、万事ヲ捨テ臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲ願ケル。セメテモ志ヲ休ントテ、世間ノ人ハ正月ノ初ハ思願フ事、イワヒ事ニスル習ナレバ、我モイワヒ事セント思テ、大晦日ノ夜、一人ツカフ小法師ニ状ヲ書テトラセケリ。此状ヲモテ、明朝元日ニ門ヲ叩テ、物申サントイヘ。キヅクヨリト問バ、極楽ヨリ阿弥陀仏ノ御使ナリ。御文トテ、此状ヲ我ニ与ヨト云テ、外ヘヤリヌ。上人ノ教ノ如ニ云テ、門ヲ叩キテ、約束ノ如ク問答ス。状状ヲ、イソギアハテサワギ、ハダシニテ出デム請取、頂戴シテヨミケリ。娑婆世界ハ、衆苦充滿ノ国也。早厭離シテ、念仏修善勤行シテ我国ニ来ルベシ。我聖衆ト共〔に〕来迎スベシトヨミツム、サメホロト泣ノスル事、毎年ニ不レ怠。其国ノ国司下リテ、人々国ノ事物語ケルツイデニ、斯ル上人アルヨシ申ケルヲ国司聞テ、随喜シツム上人〔に〕対面シテ、何事ニテモ仰ヲ承テ結縁可申ト、被レ申ケレドモ、「遁世ノ身ニテ侍リ。別ノ所望ナシト、返事セラレケレドモ、事コソカワレドモ、人ノ身ニハ必要アル事ナ

リト、シキテ被^(レ)申ケレバ、迎講ト名テ、聖衆ノ来迎ノヨソヲキシテ、心ヲモナグサメ、臨終ノナラシニモセバヤト思事侍リト被^(レ)申ケレバ、仏菩薩〔ノ〕装束等、上人〔ノ〕所望ニ随テ調ジテゾ被^(レ)送ケル。サテ聖衆来迎ノ儀式ノ臨終ノ作法ナムド、年久ナラシテ、思ノ如ク、臨終ノ時モ来迎ノ儀ニテ、終リ目出カリケリ。コレ迎講ノ始ト云ヘリ。(以下略)

一茶が『おらが春』の起稿を計画し、その巻頭にこの話を置こうとしたのは「来迎」の淵源が家の宗教、浄土真宗の経典『仏説無量寿経』(大経)の阿弥陀如来四十八願中にあり、『正信偈』とともに日ごろ唱えていた『仏説阿弥陀経』(小経)中にもその一節のあることよって以前から心中にあったこと、それと「世間ノ人ハ正月ノ初ハ思願フ事、イワヒ事ニスル習ナレバ」とあることよってだと考えられる。

「イワヒ事」は『名義抄』に「崇 イノル・イハフ」「祝 イハフ・ネグ・イノル」とあるごとく、祈ること・願うこと、の意であるが『おらが春』では「鶴亀はたぐへての祝尽しも」とあるから入祝ふことVの意に解してあるとみるのが妥当であろう。

さて、『沙石集』ではこの話を「実ニ物ニスキ、其道ヲ始ム人ハ、寤寐モ其事ニ心ヲソムベシ。習サキヨリアラズハ、懐念イヅクンゾ存セントイヘリ。ヨク／＼ナラスベキハ、臨終正念ノ大事也。」と結んでいる。『おらが春』の用紙を異にする冒頭の二丁(自筆本は冒頭の二丁だけが白紙に各面九行書き、三丁以降は天地に子持野のある用紙を用い、各面概ね十二行書きである)、これを一度清書の後、第二十一話の文・句と呼応させるために差し替えられたものとみて、普甲寺上人の話を受けた後半の部分(二丁表三行め以下)、すなわち「それとはいさゝか替りて、おのれらハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら」以下「目出度さもちう位也おらが春 一茶」(二丁裏二行め)までをその部分とすれば、文政三年正月一日の日付を有する真蹟(『一茶真蹟集』五三所収)の文章は『沙石集』の結びに添ったものとして容認できよう。

私は四十七年雑誌『解釈』七月号で、自筆本の用紙を異にする冒頭の二丁を右のごとく解し、爾来機会あるごとに

それを主調し続けているのだが、今またくりかえしてそれをいう。『おらが春』第一話の後半は、『沙石集』の結びに添って、

おのれかしらには霜をいたゞき、額にはしは^(わ)く波の寄せ来る齡にて、弥陀たのむすべもしらで、うか／＼月日を費やすうち
に、此世の縁尽せぬにや、五十余年我身につもる老を応れて、一期の月も西山にかたぶく命ながらへて、露の玉の緒の今迄切ざ
るもふしぎ。又ことし鶴亀にたぐへての祝尽し、門松もかざる。

文政三年正月一日

弥陀仏をたのみに明て今朝の春

一茶坊

と、これまでの五十余年間、弥陀を頼むすべも知らずに過して来たおのれの生涯をかえりみ、それを知った今、一切を弥陀の本願力にまかせて新しい年を迎えるという、この真蹟を定稿成立前の第一話後半の清記とみたいのだが、いかがであろうか。『おらが春』の草稿断片と推定されるものには、この真蹟のほか『一茶翁俳諧歌帖』に収められたものもある。⁽⁷⁾

『八番日記』文政二年正月の条には、つぎにあげる三首の俳諧歌がある。

かりそめの話も人のゑりもとのうき世の中も住みなるゝかな

降りながら水となり行く淡雪のあは／＼しさの世をたのむかな

行く水にさらば／＼と淡雪のあかれぬまいに流れけるかな

弥陀の本願力を知ったものの心境である。普甲寺上人の話は、聖衆の来迎にあこがれる老僧の自作自演のいわば狂言ともいえるものだが、一茶はその狂言に随喜の涙を涙す老僧の姿をみごとに描きあげたうえで、「仏門において、いはひの骨頂なるべけれ」とそれを肯定している。ひたすらに来迎をねがう普甲寺の上人は、弥陀たのむすべを知る人であり、その狂言に流す随喜の涙は、弥陀たのむすべを知る者だけのものである。しかるに一茶自身は「おのれか

しらには霜をいたゞき、額にははしはく波の寄せ来る齡まで」それを知らずという。そこに自覚があるのだ。

さきに挙げた俳諧歌が示す弥陀の大悲にすがって、現実をあるがままに、人生をさながらに生きようとする願望は「弥陀仏を頼みに明けて今朝の春」の心境と一致するとみて難はなからう。前年末までに準備されていたと推定可能な他の章段は、父の遺産問題に一応の決着をつけ、終の栖に落着いた一茶が育ちゆく愛見さと女への愛情をかみしめながら、みずからの境涯に思いやるという内容のものであり、そういうこの期の心境を綴ることに『おらが春』起稿の意図があつたと考えられる。それが年末に執筆された第二十一話で、

別に小むつかしき子細ハ不存候。たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事ハ、其身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと御頼ミ申ばかり也。……世渡る鴈そみにも我田へ水を引く盗ミ心をゆめく持べからず。しかる時ハ、あながち作り声して念仏申ニ不及、ねがはずとも仏ハ守り給ふべし。是則当流の安心とは申也。穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしの暮 一茶

と綴り、浄土門（聖道門に対していう）に決定した一茶がこれを読み返してみると、自力によって「臨終正念の大事」を「ナラス」というのでは「当流の安心」に添わない。一茶は、「仏門において、いはひの骨頂なるべけれ」と一度それを肯定したうえで、

それとはいさゝか替りて、おのれらハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらぐしく思ふからに、から風の吹けばとぶ層屋ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。

目出度さもちう位もおらが春 一茶

と書き替えて、首尾の呼応をはかったのではあるまいか。すなわち、自分は俗塵に埋れて生きる境涯ではあるが、

「後生の一大事、其身を如来の御前に投げ出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくだされませと」心に定めているから、仏門の「迎講」にあたる「鶴亀にたぐへての祝尽しも」「門松」も「煤はき」もすべて「そらぞらしく思ふ」というのである。一茶の安心についてはすでに書いたとおりであるが、今それは⁸⁾おいて、一茶なりの「自然法爾」の思想を確立したとみてよからう。そして、総括の句は、めでたさはとりたてていうほどのこともないのだが、自分なりの新春というべきだ、の意である。

四

第二話は、前述のごとく文政二年三月七日柏原の明専寺十九代秀栄の次男高丸が、柏原の南方約八キロにある樽川の雪解水に吞まれて溺死したという事件が素材である。明専寺は浄土真宗本願寺派の寺院で、小林家の菩提所である。

一茶は「あこ法師たか丸」と記しているが、「あこ」は子どもの親称、「法師」は「僧」の意に使ったのであろうが、「たか丸」は明らかに幼名であって十一歳にはなっていたが得度前の寺族である。それはともかく、その死体が「初夜過るころ」(午後八時すぎ)寺に運ばれたところ、

ちゝ母、今やおそしとかけ寄りて、一目見るより、よゝゝと人目も耻ず大声に泣ころびぬ。日ごろ人に無情をすゝむる境界も、其身に成て、さすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけぬ「る」ハことわり也^わけり。

とあって、明専寺住職夫妻に対する人間的な思いやりが示されている。諸注は多く「ほどけぬ」の「ぬ」を打消の助動詞とし、川鳥つゆ『おらが春新解』のごとく「愛執のためにおもく結ばれた心持の解けぬのは、もっともなこと

である」と解釈するが、「ぬ」の下の「る」を脱字とみて、「恩愛のきづなのために心の緊張が解け、人前でとり乱した」と解すべきである。そうでなければ、「よ／＼と人目も恥じず大声に泣ころびぬ」という状況に対する一茶の思いやりは解せまい。異母弟仙六に対し、

示弥兵衛

牛盗人と見らるゝとも、後生者の行迹すべからずとは尊とき教へなるを、いかなれば盗人にあらざるにもあらずといふ賊心の上を、肩衣もて粧ひつゝ、もはら逆道のみ行ふを後世者といふ、にが／＼しき所がら也けり（文政四年二月・浅黄空）

と、ののしり、文化五年の「取極書」、十年の「熟談書」に連判した親戚の弥市を税金の上納をのがれていると訴える一茶も、明専寺の住職に対しては格別であつたらしく、批判めいた文章は見当らない。

高丸の野送りの日「棺の供につらな」つた一茶は「思ひきや下萌いそぐワか草を野辺のけぶりになして見んと」とその挽歌を詠むが、その後、

長／＼の月日、雪の下にしをびたる路・蒲公のたぐひ、やをら春吹風の時を得て、雪間／＼をうれしげに首さしのべて、此世の明り見るやいなや、ぼつりとつミ切らるゝ草の身になりなば鷹丸法師の親のごとくかなしまざらめや。草木国土悉皆成仏とかや。かれらも仏生得たるものになん。

と記している。高丸はその罪のために溺死したというのではない。第八話では、雪のために毎年その幹を折られて、生涯一尺ばかりの栗の木を自分の境涯のたとえにしているが、そこで「我又さの通り、梅の魁に生れながら茨の遅生へに地をせばめられつゝ、鬼ば／＼山のおろしに吹折れ／＼て晴／＼しき世界ニ芽を出す日、一日もなく、ことし五十年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也」という。一茶のゆがんだ自我がここにも働いているのだ。だが前半の暖かい余韻の中で、「草木国土、悉皆成仏」という謡曲『定家』の文句に、ゆがんだ一茶の自我の投射はすっぽりと包ま

れ、「草の身になってみれば、高丸の親つまり明尊寺の住職夫妻のように悲しむに違いない。だが、草木国土、悉皆成仏といって、非情な草木や土石もことごとく成仏できるという。露や蒲公英の類もそれぞれ仏性を持っていて、高丸と相前後して成仏したに相違ない」と繕われている。

五

第三話は、天上の音楽が聞こえるという流説（おそらくそうだろう）をもとに虚構された話である。本稿が探求しようとする素材はその流説だけのだが、「いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞しためしなきにしもあらず」と『書紀』『文徳実録』にある甘露の吉兆と『本朝月令』などにある五節の舞の起源にふれ、「それを聞得ざる、其身の罪の程ニよるべし」と結んでいる。

「其身の罪の程ニよるべし」には、かれの仏教的世界観を無視はできないが、『笈の小文』の冒頭にある、

見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

に思い寄せることがなかったとはいいい切れない。鳥獸・夷狄との距離それこそ「罪の程によるべし」といわざるを得ないのではないか。

第三話には二七〇六九までの句が収めてある。文末の一句は「今の夜も鳥はほけ経鳴ニけり」と鶯の声と法華経を掛け、ことばの上のおかしみをねらったもので評価すべきものではないが、本文中に「今天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち……」と泰平の御代を謳歌する遊民を粧いながら「今の世も」と社会に対する批判の目を忘れていな

い。二九番の「馬迄もはたご泊や春の雨」は『八番日記』二月の作だが、閏四月の条の「馬迄も萌黄の蚊屋に寝たりけり」と同趣、武家の乗馬であろう。三〇番の「雀の子そこのけく御馬が通る」は諸説さまざまであるが、『七番日記』十四年の「涼まんと出れば下にく哉」と同趣とみたい。また、『猿蓑』の「追たてゝ早き御馬の刀持／去来」でつちが荷ふ水こぼしたり／凡兆」の付合（市中の巻）も思い起される。

三八番の句、五四番の句、六三番の句はともに『おらが春』での作であるが、五四の「身一ツすぐす迎、山家のやもめの哀さ／おのが里仕廻てどこへ田植笠」、六三の「越後女、旅かけて商ひする哀さを／麦秋や子を負ながらいはし売」には、その「哀さ」に対する同情というより、貧に対する批判というべきものを見るべきであろう。そして、三八「なぐさみゝわらを打也夏の月」には、慰めといつても屋内での農作業、それ以外にない貧農の生活が百姓弥太郎の心と詩人一茶の目で確かに把握されている。「わらを打」は、土間にすえた石の上に藁を置き、それを木槌で打ってやわらげ、縄をない・わらじを作るのである。そのときばかりは「涼まんと出れば下にく哉」というような屈辱もないのだ。

四九「今迄、罰もあたらぬ昼寝蚊屋」は『八番日記』六月の条に中七以下「罰もあたらぬ昼寝哉」とみえ、これが初案であろうと思われる。耕さずして食う百姓弥太郎の自責である。

四七「はつ瓜を引とらまへて寝た子哉」、五六「花つむや扇をちよいとぼんのくぼ」の二句も『八番日記』で初案を得た好句である。前者には、その粗っぽい野性となまなましい生活感情があり、後者にはこまかい動作の確かな把握があつてもに一茶の俳諧の典型というべきものである。一茶調というべきものの中には、激情から生まれた好句も少なくないのだが、距離を置いてあるがままの対象をこだわりなく詠んだ四七のような好句多いのである。

六

第四話は、鬼貫の「禁足之旅記」に擬した虚構であろう。「卯花月十六日」というその日の日記を見ても、旅立の形跡はない。

鬼貫のそれは、父の老衰を案じて旅を断念し、夢想で書きあげたという紀行である。一茶は「ことしみちのくの方は修業せんと乞食袋首〔に〕かけて、小風呂敷せなかに負たれ、影法師、さながら西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖」と書き出している。「みちのくの方」は、『おくのほそ道』をさすことはいうまでもないし、「修業」は俳諧修業である。この章段の中ほどから末尾ちかくは『おくのほそ道』の首途の章段に思い寄せたもので、『おくのほそ道』の旅、それを考えることによって、みずからの進むべき方向を見定めようとする、それはほのかな憧憬であつても、芭蕉以下の俳諧の系譜に連なりたいという意識にかわりはない。だが、芭蕉が「西行の和歌における、宗紙が連歌における、雪舟の絵における、利久が茶における、其貫道する物は一なり」(『笈の小文』)といったのに比し、一茶は以雲の「西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖」によって、「影法師、西行らしく見えて殊勝なるに、心、雪と墨染の袖と思」うという。そして、首にかけた「頭陀袋」は「乞食袋」(コッジキの袋ではない)という。それをそのまま真摯な気持からと解すわけにはいくまい。百姓弥太郎の真骨頂というわけにもいくまい。だから、「久しく寝なれたる菴をうしろになして」といって「住なれたる菴」とはいわないのだ。第四話の三句め「けふの日も棒ふり虫よ翌も又」(七三)は「朱文公勸学文」の俳訳だが、「棒ふり虫」にみずからを擬す、そういう自嘲めいた気分も否定できない。

文末の「行道もしきりにすゝまざれば、とある木陰に休らひ瘦脛をさすりツゝ詠むるに」は、「前途三千里のおも

ひ胸にふさがりて……是を矢立の初として行道なほすゝます」とある『おくのほそ道』の首途の文章に思い寄せたもので、『寛政三年紀行』の四月十日の条にも「前途百万歩胸につかへて、とある木陰に休む」とある。

芭蕉は「野ざらしを心に風のしむ身かな」(『野ざらし紀行』)と詠み、「去年のたびより魚類肴味口に払捨、一鉢境界乞食の身こそたうとけれど、うたひに侘し」(推定・猿雖宛書簡Ⅱ元禄二)と風狂に徹する覚悟を深め、草庵を旅費に贅え、無一物となって旅(『おくのほそ道』)に出た。一茶はこの章段で、

おのれ六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて帰らんことも白川の関をはるく越る身なれば、十符の菅菰の十に一ッもおぼつかなしと、案じつゞくる程に、ほとんど心細くて、家／＼の鶏の時を告ル声もとってかえせとよぶやうに聞へ(中略)柏原へあの山の外、雲のかゝる下あたりなどおしはかられて、何となく名残りおしさに、思ふまじ見まじとすれど我家哉

と、書いている。途中でひきかえすつもり、しかも夢想の旅日記だからであろうか。『おくのほそ道』の芭蕉の足跡をたずね、それによって俳諧の系譜に連なろうとする憧憬はどうなったのか。「一鉢乞食の身こそたうとけれど」どころか「思ふまじ見まじとすれど」というのである。この章段、清書後の推敲の跡は皆無、一茶はこれでよしとしたのである。参禅して、聖道門を往く芭蕉と覚愚・自然法爾の浄土門に決定した一茶の相違はここでも明らかである。

この章段に付された句歌は二十二・七六・七七の句には、周囲に対する冷たい批判の目が働いている。七七「起／＼の欲目引張る青田哉」、早朝水田を見廻る篤農とは把握せず、すぎあらば我が田に水を引かんとする小農に見立てる一茶には、七六「心ニ思ふことを／故郷へ蠅まで人をさしニけり」という長い闘争体験から生まれた故郷人の把握があるのだ。だが、この章段中にも距離を置いて対象をあるがままに把握した、八一「夕貞の花で涕(符)てかむおぼゝ哉」、八二「あつい迎つらで手習した子哉」が収めてある。

(以下続稿)

(注)

- (1) 詳しくは拙稿「おらが春の起稿時」(雑誌「解釈」46・9、のち日本文学研究資料叢書『蕪村・一茶』所収)を参照されたい。
- (2) 詳しくは拙稿「おらが春の成立をめぐる」(『関東短大紀要』第18集所収)を参照されたい。
- (3) 日本古典文学大系『沙石集』の解説を参照した。
- (4) 詳しくは拙著『一茶小論』116Pを参照されたい。
- (5) 詳しくは拙著『校本・おらが春』の注・拙稿「おらが春覚書」(「紀要」昭和学院創立三十周年記念号)を参照されたい。
- (6) 注(1)参照。
- (7) 詳しくは拙稿「一茶翁俳諧歌帖の俳文とおらが春」(『関東短大紀要』第19集所収)を参照されたい。
- (8) 詳しくは拙稿「おらが春第二十一話と教行信証」(「紀要」昭和学院短大・第8号所収)、「望郷と回帰——一茶調の背後——」(「俳句とエッセイ」49・2・特集一茶)を参照されたい。